

# 児童養護施設視察により養護教諭を目指す学生が得た 学びの学年比較

小川昂子<sup>1)</sup> 工藤宣子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学教育学部・学部生 <sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

## Grade Comparison of the Learning that Students who want to be a Yogo Teacher got by Foster Home

OGAWA Takako<sup>1)</sup> KUDO Noriko<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Student <sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University,

1～3年生の千葉大学教育学部養護教諭養成課程学生の希望者ととも、児童養護施設（A学園）の視察を行った。参加学生が児童養護施設視察を通して、どのような学びを得たか明らかにするため本研究を行った。

キーワード：養護教諭（Yogo Teacher） 児童養護施設（Foster home） 学年比較（grade comparison）

### I. はじめに

千葉大学・東京学芸大学・茨城大学・埼玉大学の4大学の教育学部系養護教諭養成課程の学生は年に1回、担当校持ち回りで関東養護教諭学生交流会と称し、学生同士の学びの交流を行っている。平成24年度は東京学芸大学が担当で、第5回関東養護教諭学生交流会（於 東京学芸大学 平成24年12月16日）が行われ、「養護とは」という題目の下、社会福祉法人A学園（児童養護施設）職員S氏の特別講演が行われた。

講演後、A学園を訪問、視察する企画を立て、千葉大学養護教諭養成課程の学生を募り、1～3年生の希望者と共にA学園の視察を行った。

本研究では、児童養護施設視察を通して、参加学生がどのような学びを得たか、その学年差を明らかにすることを目的として調査・分析を行った。

### II. 本研究の方法と対象

平成24年度末に、千葉大学教育学部養護教諭養成課程1～3年生を対象として、児童養護施設（A学園）の視察を希望する学生の募集を行った。（平成25年1月より1ヶ月間）

参加申込者は21名（1年生8名、2年生7名、3年生6名）、当日参加者は17名（1年生4名、2年生7名、3年生6名）であった。平成25年2月15日、A学園の視察を行い、視察終了後、参加者に記名式自由記述による調査用紙を配布し、感想の提示を求めた。質問内容は「A学園を訪問して、感じたこと・考えたことを記入してください」である。調査期間は平成25年2月15日～3月1日、回収率は100%であった。

回収した感想は、まとまりのある文脈ごとに切片化し、その後、記述内容の意味を変えないよう簡潔な文章に表

連絡先著者：工藤宣子

記し、データ化した。回収したデータは70個（1年生13個、2年生29個、3年生28個）であった。次に、そのデータを研究者2名で意味の類似している内容ごとに分類し、内容を代表するサブカテゴリーを作成した。さらに、その内容を代表するカテゴリー名を作成し、その学年差を比較した。

### III. 児童養護施設（A学園）の概要と視察の内容

#### 1 設立趣旨

視察施設は社会福祉法人A学園である。当施設は昭和21年にカトリックA修道会の宣教師、B神父の下、少年たちの教育を目的として創設された。職員と児童、児童同士の信頼関係の構築に重点を置いた養護理念を基礎としている。また、児童が様々な個別的・社会的障害を克服し、成熟した人格に到達できるように最大限の援助を与えている。またこの理想の実現のために児童の生活環境を美しく整えることが特に重要であるとしている。

現在、男子112名（2歳から20歳）が生活を送っており、園長をはじめ職員64名で運営している<sup>1)</sup>。

#### 2 視察内容

当施設では、月1回見学可能日を設定している。視察の内容は、①園長からの本施設の概要説明、②施設の見学（本課程学生の他に、地域の民生委員、他県の児童養護施設職員と共に見学した）③施設についての質疑応答（返答者は学生交流会で講師を務めたS氏）である。

### IV. 結果

分析対象となったのは、17名の自由記述から得られた70個のデータである。そのデータを類似性により分類した結果、17のサブカテゴリーを得た。さらにサブカテゴリーを分類した結果【児童養護施設のイメージ】【生活環境】【職員】【子ども】【連携】【自己の省察】の6つの

カテゴリーを得た。また、いずれにも属さないデータを【その他】とした。

【児童養護施設のイメージ】のサブカテゴリーは、「プラスイメージ（A学園の施設の素晴らしさに驚いた）」、「マイナスイメージ（少し入りづらい空気があった）」、「**視察に基づく感想**（子どもが安心してのびのびと過ごせる環境が整っていると感じた）」、「**ボランティア経験に基づく感想**（ボランティアで関わっている養護施設とは雰囲気は全く異なっていた）」の4つのサブカテゴリーであった。

【生活環境】のサブカテゴリーは「**配置人数**（子ども12人と職員5人で家ごとに『家庭』として生活するのがA学園の最大の特長であった）」、「**施設設備**（木の温かみのある建物と自然にあふれたあの場所だからこそ、子どもが健やかに成長していけるのだろうと思った）」、「**食事**（食事を子どもの前で作るとはすべての子どものために行われていることを知った）」の3つのサブカテゴリーであった。

【職員】のサブカテゴリーは「**受容と傾聴**（職員の方が子どもと接する際、受容と傾聴を心がけているとおっしゃっており、これが温かさにつながっていると思った）」、「**職員の姿勢**（子どもたちのことを考え、やりたいことをやらせてあげたいと思っていることが伝わってきた）」、「**職員のケア**（職員のケアをすることはすべての子どものために行われている）」の3つのサブカテゴリーであった。

【子ども】のサブカテゴリーは「**子ども理解**（子どもは一人ひとり違う問題を抱えている）」、「**愛情の再構築**（本物の『家庭』のような環境で子どもたちが過ごすことができ、それまでに愛情を受けていなかった子どもも愛を感じられると思った）」の2つのサブカテゴリーであった。

【連携】のカテゴリーでは「**連携**（地域やいろんな人と連携が必要）」というサブカテゴリーであった。

【自己の省察】のサブカテゴリーは「**姿勢**（養護教諭にとっても学校という集団を見る目と保健室や教室で一人ひとりと向き合う、どちらかに凝り固まらずその場の必要性にあわせて柔軟に取り組めたら良いのだろうと思った）」、「**学校・養護教諭への応用**（職員のお子さんとの関わり方や職員の方同士、職員と学校との連携の仕方は学校現場においても応用できるものがあると感じた）」、「**子ども理解**（子どもたちと接するとき、子どもたちは何故そうしたいと思うのかを考え、ただルールだからこうしなさいというのではなく、子どもたちの考えと向き合って接していきたい）」、「**養護について**（先生方の姿勢がすばらしく「養護」について考えることができた）」の4つのサブカテゴリーであった。（表1）

## V. 考 察

### 1. 児童養護施設のイメージ

表1【児童養護施設のイメージ】に示すように児童養護施設に対して「少し入りづらい空気があった（2年生）」といったマイナスイメージが、視察を通して「A学園の設備の素晴らしさに驚いた（2年生）」というよう

に、児童養護施設に対するイメージの変容が認められた。

サブカテゴリー「**視察に基づく感想**」での切片数は1年生が最も多く、「子どもが安心してのびのびと過ごせる環境が整っていると感じた（1年生）」をはじめ児童養護施設についての感想を記すものが目立った。1年生にとって、児童養護施設を視察できる機会というものが新鮮であったことが伺える。

尚、本分析では本視察前の児童養護施設見学経験の有無について調査しなかったが、分析箇所の中で本視察が初めての児童養護施設訪問と記入した者が多く見られた。

また、2年生では自身のボランティア経験等と比較した記述がみられた。「ボランティア先で関わっている養護施設とは雰囲気が大きく異なっていた（2年生）」といったように、ボランティア先とA学園の差違について述べた記述があった。

さらにボランティア経験のある、他の学生の感想ではA学園の独自性を踏まえ評価した上で、他の施設での応用は厳しいと言及していた。「敷地が広いせいもあるが、他とは違う雰囲気を感じた。A学園の方針は良いと感じた。しかし、職員の仕事量や負担が大きく、ほかの施設で実施するのは難しいと感じた（2年生）」ということから、他の施設の実態を把握し、またそこで働く身としての経験を積んでいるからこそこのような記述が出てきたと思われる。

### 2. 生活環境

【生活環境】では、「**配置人数**」「**施設設備**」「**食事**」の3つのサブカテゴリーであった。生活環境については、「木の温かみのある建物と自然にあふれたあの場所だからこそ、子どもが健やかに成長していけるのだろうと思った。（2年生）」というように、A学園の施設設備の充実や配置人数などについての記述があった。生活環境に関連した感想では、他学年に比べ2年生の記述が多くみられた。

視察の中で、子どもたちの生活している小部屋や居間、洗面所など生活空間を見学できたことは、児童養護施設の子どもの生活環境についてより一層理解を深める要因になったと考えられる。

### 3. 職 員

【職員】のサブカテゴリーは「**姿勢**」「**受容と傾聴**」「**職員のケア**」の3つのサブカテゴリーであった。

「**受容と傾聴**」のサブカテゴリーについては、「職員の方が子どもと接する際、受容と傾聴を心がけているとおっしゃっており、これが温かさにつながっていると思った（2年生）」といった「**受容と傾聴**」に関する記述を2年生のみが挙げていた。「**受容と傾聴**」については、関東学生交流会の講演会のなかでもS氏がA学園の職員の基本的姿勢として大切であると主張しており、本視察時にもその必要性を度々強調していた。

「**職員のケア**」については、A学園の職員構成に着目した感想である。関東学生交流会において、S氏よりA学園の職員構成について説明があった。A学園は、スーパーバイザーや顧問精神科医、心理担当医を職員組織に組み込んでいる。S氏によると、この職員体制は職員の

児童養護施設視察により養護教諭を目指す学生が得た学びの学年比較

表 1 児童養護施設視察における参加者の感想や意見 (N=70)

カテゴリー	サブカテゴリー	学年	記 述 内 容	切片数	
児童養護施設のイメージ	プラスイメージ	1年生	はじめに聞いたお話では、被虐の子が多いということで、どんなところで生活しているのだろうかと気になったが、実際に見せてもらうと生活感が感じられないほど整っていて、本当にそんな子が来ているのか疑いたくなる気もした。	2	
		2年生	A学園の設備の素晴らしさに驚いた。	3	
		3年生	A学園は恵まれた施設なのだった。	2	
	マイナスイメージ	1年生	(記述なし)		
		2年生	少し入りづらい空気があった。	4	
		3年生	知っている施設は逃げ出す子も多く、地域からもあまりよく思われていないところである。	1	
	[30] 視察に基づく感想	1年生	子どもが安心してのびのびと過ごせる環境が整っていると感じた。	8	
		2年生	実際に子どもたちが住んでいる家を見学できて良かった。	4	
		3年生	知っている養護施設との差を感じた。	4	
	ボランティア経験に基づく感想	1年生	(記述なし)		
		2年生	ボランティアで関わっている養護施設とは雰囲気が全く異なっていた。	2	
		3年生	(記述なし)		
生活環境	配置人数	1年生	(記述なし)		
		2年生	子ども12人と職員5人で家ごとに「家庭」として生活するのがA学園の最大の特長であった。	1	
		3年生	(記述なし)		
	[5] 施設設備	1年生	(記述なし)		
		2年生	木の温かみのある建物と自然にあふれたあの場所だからこそ、子どもが健やかに成長していけるのだろうと思った。	2	
		3年生	建物内の施設設備を整えることはすべての子どものために行われていることを知った。	1	
	食事	1年生	(記述なし)		
		2年生	(記述なし)		
		3年生	食事を子どもの前で作ることはすべての子どものために行われていることを知った。	1	
職 員	受容と傾聴	1年生	(記述なし)		
		2年生	職員の方が子どもと接する際、受容と傾聴を心がけているとおっしゃっており、これが温かさにつながっていると思った。	4	
		3年生	(記述なし)		
	[9] 職員の姿勢	1年生	(記述なし)		
		2年生	A学園のように子どもたちの話を聞いてあげる余裕をよりつくってあげれば、もっとのびのびした雰囲気になるのではないかと感じた。	2	
		3年生	子どもたちのことを考え、やりたいことをやらせてあげたいと思っていることが伝わってきた。	2	
	職員のケア	1年生	(記述なし)		
		2年生	(記述なし)		
		3年生	職員のケアをすることはすべての子どものために行われている。	1	
子 ども	子ども理解	1年生	(記述なし)		
		2年生	(記述なし)		
		3年生	子どもは一人ひとり違う問題を抱えている。	3	
	[5] 愛情の再構築	1年生	(記述なし)		
		2年生	本物の「家庭」のような環境で子どもたちが過ごすことができ、それまでに愛情を受けていなかった子どもも愛を感じられると思った。	1	
		3年生	自分の親や生活が普通だったり、それしか知らない子どもたちにとっては安心して生きることですら再構築をしなければならぬと知り、やりきれない思いでいっぱいだった。	1	
連 携 [7]	連携	1年生	(記述なし)		
	2年生	地域と深く結びつき、協力し合うことを学んだ。	3		
	3年生	地域やいろんな人と連携が必要。	4		
自己の省察	[10] 姿勢	1年生	養護教諭にとっても学校という集団を見る目と保健室や教室で一人ひとりと向き合う、どちらかに凝り固まらずその場の必要性にあわせて柔軟に取り組めたら良いのだろうと思った。	1	
		2年生	(記述なし)		
		3年生	子どもの背景に気づき私たち養護教諭が早期に気づくことが大切。	3	
	学校・養護教諭への応用	1年生	職員のお子さんとの関わり方や職員の方同士、職員と学校との連携の仕方は学校現場においても応用できるものがあると感じた。	1	
		2年生	(記述なし)		
		3年生	養護教諭として働く上でまずは学校環境を整えてあげることが大切。	2	
	子ども理解	1年生	(記述なし)		
		2年生	(記述なし)		
		3年生	子どもたちと接するとき、子どもたちは何故そうしたいと思うのかを考え、ただルールだからこうしなさいというのではなく、子どもたちの考えと向き合って接していきたい。	1	
	養護について	1年生	(記述なし)		
2年生		(記述なし)			
3年生		先生方の姿勢がすばらしく「養護」について考えることができた。	2		
そ の 他 [4]	1年生	大人数の集団を見ていくものから少人数制に方向転換したことが結局すべてよくなるきっかけのように聞こえ、それは少人数の方が一人ひとりと向き合うことが出来、目が届く、気が届くからだと思った。	1		
	2年生	個人を尊重、大事にしていることがとても伝わってきて、安心して暮らしていることが想像できた。	3		
	3年生	(記述なし)			

[ ] 内は各カテゴリーの合計切片数を示した。

バーンアウトを防ぐだけでなく、職員に対して子どもへの接し方の助言を専門的な視点で見てくれる人が職場内にいることは、職員にとって安心であるということであった。本感想は以上のことを示したものと見える。

#### 4. 子ども理解

【子ども】のサブカテゴリーは、「子ども理解」「愛情の再構築」の2つであった。「子ども理解」については、3年生のみが子どもを中心としたとらえ方をしていた。本視察では、子どもたちとかわる時間こそなかったが3年生は生活空間を見学することによって、その生活空間で生活している子どもの実態について感じ取れるようになっていたと考えられる。

「愛情の再構築」は、1年生の記述はなかったが2年・3年生に記述がみられた。施設の見学を通して、子どもに対して思いを寄せることができていることが示唆された。

#### 5. 連携

【連携】については、「連携」のサブカテゴリーにまとめた。地域との連携の必要性について2年生、3年生が複数述べていた。視察当日、地域の民生委員や他の児童養護施設の職員と共に見学したことも連携の大切さについて考える上で影響を与えたと思われる。視察時の質疑応答の中では、学校側の立場に立ち、児童養護施設の職員とどのような連携を結んでいく必要があるかについて質問する学生が見られた。S氏による解答は、学校と地域、施設が連携していくための児童養護施設側からの意見であった。養護教諭になるために授業等で学校内外の連携について学んでいる2・3年生にとっては、より深い学びとなったようである。

#### 6. 自己の省察

【自己の省察】のサブカテゴリーは「姿勢」「学校・養護教諭の応用」「子ども理解」「養護について」の4つであった。本カテゴリーは1年生と3年生の記述で構成されており、1年生では本視察での学びを、「養護教諭にとっても学校という集団を見る目と保健室や教室で一人ひとりと向き合う、どちらかに凝り固まらずその場の必要性にあわせて柔軟に取り組みたら良いのだろうかと思った(1年生)」といった学校や養護教諭として捉えた記述があった。

3年生は、視察での学びを踏まえ、「子どもの背景に私たち養護教諭が早期に気づくことが大切(3年生)」というような記述もあった。このような気づきは、1年生や2年生には見られなかった。これは、在学中に経験した様々なことを相互に関連づけて考えられるようになっていたため、本視察を通してでも養護教諭や学校の視点から捉えることができたのではないかと考える。それには在学中の大学の授業やボランティア経験等が影響を与えているのではないかと考えられる。

## VI. まとめ

本視察を通して、本課程学生が得た学びの特徴は以下

の3つが挙げられる。まず、児童養護施設のイメージの変容である。初めて児童養護施設を見学した学生も多かったため、視察を通し児童養護施設に対しプラスイメージを抱いた学生がどの学年にも認められた。

養護教諭は、子どもの成長・発達を支援する仕事である。そのために、様々な背景を持つ子ども達の生活について理解を深めることが大切であり、その理解のために、児童養護施設をはじめとした施設へ訪問するという機会を持つことが重要であると考えられる。学生時代にそのような体験を多く積むことは養護教諭となって学校現場に出た際、子どもの置かれている状況の理解をより深めると考える。

2点目は、本視察を通して得られた学びに学年差があったということである。1年生は、児童養護施設を見学した経験に基づく感想を多く述べたが、2年生・3年生は【生活環境】【職員】【子ども】【連携】のカテゴリーにも分類される感想を記載していた。さらに3年生では、本視察において学んだ事柄はもちろんのこと、それらを踏まえた上で【自己の省察】をしていた。

3点目は、ボランティア等の経験である。ボランティア等での経験は実践からの学びが大きいと共に「職員の方の仕事量や負担が大きく、他の施設で実施するのは難しいと感じた」等、批判的思考も育てるのではないかと考えて示唆された。本課程学生の特徴として、3年生で千葉県教育委員会が主催するたまごプロジェクトへの参加やその他ボランティア経験を行う者が多いことは、学生の学びを深化させるよい機会となっていることが示唆された。本分析では、ボランティア経験の有無での学びの違いは言及しなかったが、大学での授業に加えて実践的に学べるボランティアは力量形成に影響すると考えられる。

本研究では児童養護施設(A学園)視察を通して参加者が感じた感想を基に、学年間での学びの違いとして述べてきた。調査対象者が計17名と量的に不十分なため、本研究結果が個人の学びの違いなのか、それとも学年による違いなのか明確に断言はできない点もある。この点について、今後さらに研究を進めたい。

## 謝 辞

本研究の調査にご協力いただいたA学園職員をはじめとする皆様、そして本論文の執筆にあたってご指導いただきました岡田加奈子教授に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 社会福祉法人A学園 パンフレット

## 参考文献

- 依田尚也(2012)「児童養護施設の入所児童に対して大学生が抱くイメージ ―児童養護施設におけるボランティア経験に着目して―」『学習院大学人文科学論集21』, p 167-183